

インド留学記

その8

出版記念

パーティー(2)



師範学院講師
師範大学講師
駒園
阿部 慈

4

バンダールカル研究所のゲストハウスは、ニザムズゲストハウス(Nizam's Guest House)とも呼ばれます。ハイデラバードのニザム王が多額の資金を出して建立し、研究所に寄進したところからその名があります。かつてのインドの王様(マハーラージャ)は大きな力があつたことがしのばれます。

このゲストハウスは二階建てで、都合八部屋

あります。中村元先生やハーヴアード大学のインゴールズ先生など著名な先生方がプーナを訪れたときに、このゲストハウスに宿泊されました。現在でも、二、三人の日本からの研究者や留学生が、欧米よりの研究者とともに滞在し、勉強に励んでいます。わたしもここに都合四年間住みましたので、とてもなつかしいところです。

このゲストハウスのメインホールは、第二次世界大戦直後、プーナ大学がボンベイ大学から

分離独立するさいに、一時、プーナ大学の本部でもありました。その旨を刻したパネルがメインホール入口に掲げられています。それで、バンダールカル研究所の職員たちは、

「プーナ大学（といっても大学院大学ですが）の草創期はわれわれの手によって作られたのだ」

と、胸を張ります。

5

このニザムズゲストハウスのメインホールに、わたしの学位論文出版記念を祝して、七〇名ほどの人々が集まってくれました。お世話になった大学関係の先生方、アメリカ・ドイツ・カナダ・日本などからの留学生、バンダールカル研究所の先生方・職員一同、それに下働きのピューンたちでした。

インド人（ミスター・ダムレー）の奥さんに

なっている里子・ダムレーさんが、六器の生花を美しく生けてくださいました。小さな日本が、来臨の人々の目をしばしなごませてくれました。インドティーとスナック（ビスケットなど）、それに少々のブドウがふるまわれました。七〇名に二〇〇ルピー（当時の邦貨で六〇〇〇円）の予算でしたから、その程度のことしかできませんでした。しかし、日本では考えられないほどの安さでした。

6

先生方や友人たちには、御礼を兼ねて招待したのですが、わたしはその種のパーティーには参加できない非バラモン階層のピューンたちをパーティーの席につけさせたかったです。かれらは、いつも給仕をするか、隅の方に立って、出席者たちの談笑や飲み食いを見ているだけなのです。そして、パーティーのあと、かれらの

残り物を少しづつ分けあって食べているので
す。わたしは、そんなかれらを一度パーティー
なるものに招待したかったです。やせこけて、
目ばかりギョロギョロしているかれらと同じテ
ーブルに着いて茶が飲みたかったのです。

しかし、パーティーは、会場の広さと給仕人
の必要性ということから、七〇名が一同に会す
ることなく、三回に分けてなされました。第一
回目^が先生方と留学生たち、第二回目^が研究所
職員とプレス^の連中たち。ピューンたちは遠慮
した、ということもあつたのでしよう、結局メ
インテーブルには着きませんでした。

しかしながら、サイドテーブルで、ビスケッ
トをほおぼりながら茶を飲んでいた研究所夜警
のガムパット（花^{はな}作^{つく}師^しカースト）のほほのゆる
みが、ブドウの一房一房を口に運んでいたゲス
トハウス・世話係のトプター（農民カースト）
の目のやさしさが、今も思い出されてなりませ

ん。

7

一八〇ページの小著は、恩師ババット先生に
捧げられました。コユナツツとブーケ（当地で
はグッチという）を添えて。八十七歳の老大学
者（今年九十六歳を迎えられる）に捧ぐには、
いとど拙いものではありませんが、先生は鳩の
ような目をなごませて受けてくださいました。
わたしの心には、七年の青春を燃やし尽したと
いういささかの感慨^があり、それが思わず知ら
ず、ほほに熱いものを流させました。

ミセス・ババットには、オーランガバード・
シヨールとコユナツツを手渡しました。師（グ
ル）は弟子に直接「法」（ダルマ）を教示する^が、
グルの夫人は間接的に（例えば、お茶やお菓子
などをふるまうことによって）面倒を見るので、
弟子の学業^が修了したときには、シヨール（三

○ルピーくらい）を奥様にプレゼントするのが
当地のならわしとされるのです。シヨールとコ
コナツツを手渡したとき、夫人はいささかの驚
きと慈しみをこめたまなざしで、わたしをじっ

と見つめてくれました。本年八十八歳になられ
るはずです。
(つづく)

